

「シューバーン。」

「うわぁきれいだな。」

宮川の上の空に広がる花火。ていぼうに、すずしい風があたる。ゆかたきて、花火を見る古川の子。赤ちゃんから、大人まで、花火を見て楽しむ。花火を打ち上げる人たちの想い、それが花火にこめられている。花火が打ち上げられる前、ゆかたを着て、ぞうりをはいて花火を待つ。子どもたちは、友達などと見る。わたしが花火を初めて見たとき、おぼえてないが、2才、3才ぐらいから、おぼえられるようになった。小さいころは、花火の「ドン」という音にビビッていたけれど、なれてきた。

初めてのゆかた。初めてのぞうり。それなどを着たり、はいたりして、花火を見ることが楽しくて、まちどうしかった。わたしは今の五年生でも、まちどうしい。だから、花火は、赤ちゃんから、大人まで、花火がすきなのかな、と思う。

わたしは、花火を打ち上げる人は、花火の火があたらないなと思った。それをお母さんに聞くと、「打ち上げる人は、川のそばでやるから、あたらんよ。」と聞いていました。

わたしの楽しみは、ちよの松原に花火大会にだけ、「やし」が来ることです。だから、そこにいって、果物の桃を使ったかき氷を買って、次に、ベビーカーを買って家で食べました。花火大会の始まる合図「ドン」という音で外に出ました。そして、ていぼうへ行きました。すると花火が宮川の上で「バーン」とはじけました。「ドン」「ドン」といっばい花火が上がりました。いろんな形の花火が打ち上げられました。一番長く花火が続く所は、ちよの松原です。次は、三の町、次はていぼうです。

わたしは、大人になっても、おばちゃんになっても、花火を見たいし、友達や、もし子どもが生まれたら、子どもたちと見たいです。わたしが死んでしまっても花火が残ってほしいです。